

森鷗外「棧橋」の問題

篠原義彦

森鷗外は明治四十三年五月一日に発行された「三田文学」創刊号に、鷗外の署名のもとに作品「棧橋」を発表している。創刊号の二頁から八頁までに掲載された短篇で、一頁の題名「棧橋」の下には、(写生小品)と記されている。文久二年生まれの作者は、この年数えて四十九歳、知命を前にした年のことである。

鷗外の日録明治四十三年三月八日の条には、「薬剤官会議を開く。衆議院に赤十字社に関する質問出づ。次官予に社を訪ひて調査せんことを命ず。大臣抑止して社の職員を召して問ふこととなる。長井行来訪す。棧橋成る。母上茉莉をつれて賀古へゆきます。妻同窓会にゆく。藤岡作太郎死せしにより弔詞を遣す。」とあり、繁忙なる公務の中で、「棧橋」の稿が成ったことが知られる。そして、この日から数えて一か月余を経た四月十一日のくだりには、「煖なるゆえ裘を脱ぐ。悪路、中館長三郎(大阪)に書を遣す。夜平野万里来話す。棧橋を三田文学に出すこととす。日在の別荘の番人夫婦来り宿る。」とあり、また、二十四日の日曜の条には、「きみ子が子の病を校す。棧橋を校す。」の記事が見られる。

作品「棧橋」の成稿は三月八日、そして、「三田文学」への発表が五月一日であり、脱稿から掲載に至るまで比較的短時日に事を運ぶ傾きのある鷗外としてはかなりのスローテンポではある。また、四月十一日の、「夜平野万里来訪す。棧橋を三田文学に出すこととす。」という筆致からすると、「扉」と「三田文学」の関係をめぐって、何らかのやり取りがあったはずであり、万里の諒解を得て「棧橋」を「三田文学」に発表することに決した感さえする記述である。

写生小品「棧橋」が「三田文学」の創刊号を飾った五月一日、雑誌「扉」には鷗外の手になる小説「青年」の五と六とが掲載されている。この年の三月来「扉」に連続して発表されている「青年」の六は、天長節の午後、神田のある倶楽部での例会に出かけた主人公小泉純一の前に平田附石なる人物が登場する場面で終わっている。「此時梯子の下で、『諸君、平田先生が見えました』と呼ぶ声があった。平田といふのは附石の氏なのである。」とは絶妙である。「附石」は、石を手のひらでたたくの意、平田附石の「平田」は平手に通じ、「附石」は漱石を容易に想起せしめる鷗外の巧妙な命名法である。「併し教員を罷めた丈でも、鷗村なんぞのやうに、役人をしてゐるのに比べて見ると、余程芸術家らしいかも知れないね。」とはみごとな揶揄である。鷗外もなかなか手の込んだ芸当をやるものである。因みに、前年十月十四日に完結した「それから」に続く作品として、夏目漱石が「門」を「朝日新聞」に連載し始めたのは、「青年」の壺及び式が「扉」に発表された三月一日のことであった。「三四郎」を存分に意識した「青年」の創作の過程で産み落とされた小品、それが「棧橋」であるが、「それから」から「門」へと展開する漱石の作品がその根底におどろおどろしさを漂わせているのに対して、鷗外の作品「棧橋」には香気がある。前者が姦通と相對峙する絵柄を内に包んでいるのに対して、後者には矜持のもとらす禁忌の構図がある。

ところで、「棧橋」脱稿の日である三月八日の日録の中の、「衆議院に赤十字社に関する質問出づ。次官予に社を訪ひて調査せんことを命ず。」云々について、竹盛天雄は、「棧橋」という作品は、健康を害しかねてからの

思わしからぬ石本次官との関係も悪化して、勤務上の危機を体感しているさなかに成立していることが瞭らかである。心身のコンディションがくずれそうになったとき、その『混沌』を馴致し反撥するような形で創作活動に入っていく、日常的猥雑さを乗り越えるべき芸術的加工と工夫とが企てられる——そこに鷗外における積極主義のあらわれ、『書くこと』のボタンが見いだされる。』と記している。竹盛天雄がいみじくも指摘する「日常的猥雑さ」は、ひとり石本新六陸軍次官との角逐のみにとどまらなかつたはずである。拊石ならざる漱石に対する鷗外の意識もその一つであった。会場の二階に上がった純一は、「兎に角、君、ライフとアアトが別々になつてゐる奴は駄目だよ。」という声高の科白を耳にした。

話題に上つてゐるのは、今夜演説に来る拊石である。老成らしい一人が云ふ。あれは兎に角芸術家として成功してゐる。成功といつても一時世間を動かしたといふ側でいふのではない。文芸史上の意義でいふのである。それに学殖がある。短篇集なんぞの中には、西洋の事を書いて、西洋人が書いたときや思はれないやうなものがあると云ふ。さうすると、さつき声高に話してゐた男が、かう云ふ。学問や特別知識は何の価値もない。芸術家として成功してゐるとは、旨く人形を列べて、踊らせてゐるやうな処を言ふのではあるまいか。その成功が嫌だ。人形を勝手に踊らせてゐて、エゴイストらしい自己が物陰に隠れて、見物の面白がるのを冷笑してゐるやうに思はれる。それをライフとアアトが別々になつてゐるといふのだと云ふ。かう云つてゐる男は近眼目がねを掛けた瘦男で、柄にない大きな声を出すのである。傍から遠慮げに喙を容れた男がある。「それでも教員を罷めたのなんぞは、生活を芸術に一致させようとしたのではなかるうか。」「分かるもんか。」「目金の男は一言で排斥した。」「日常的」ならざる、文芸的「猥雑さ」とでも命名すべきであろうか。剣呑なる橋を渡りつつ、あえて「猥雑さ」をスプリングボードにするの感さえる。鷗外は挑発的であり、挑戦的である。そして、そのような「猥雑

さ」の対岸に、「棧橋」の主人公である伯爵夫人のきりりと引き締った矜持がある。禁忌を伴った矜持の絵柄がある。それは、「それから」の三千代や「門」の御米には見られないものであり、婦徳とでも呼ぶべき概念の中で生きる女性の姿でもある。日常的猥雑さと文芸的猥雑さは、作品創造の極めて重要な糧でもあった。

小品「棧橋」は、以下の描写で始まり、その短かい幕を閉じるまで、すべて横浜港の棧橋がその舞台である。すなわち、「棧橋」は、主人公の伯爵夫人が女中に取り巻かれて登場し、そして、再び女中に取り巻かれて棧橋を後にするまでのことを描いている。

棧橋が長い長い。

四筋の軌道が、縦に斜に切つてゐる鉄橋の梁に、長い桁と短い桁とが、子供のおもちやにする木琴のやうにわたしてある。靴の踵や下駄の歯を噬みさうな桁の隙から、所々に白く日の光を反射してゐる黒い波が見える。

空は真蒼に晴れてゐる。

今日立つ夫と並んで腰を掛けてゐた、新橋発の一等汽車の室内では、風が吹くやうには思はなかつたが、横浜停車場から乗つた人力車を降りて、此棧橋の上立つて見れば、三月五日の風がまだ肌を刺すやうに吹いて来て、吾妻コオトの裾を翻すのである。今日立つ夫の胤を宿して、臨月の程遠からぬ体に、寛く纏つてゐる、銀鼠色の吾妻コオトである。髪は束髪に結はせて出た。ボアは白の駝鳥である。

総の下がつた萌葱色の蝙蝠傘を挿して、四五人の女中に取り巻かれて歩む。

長い長い棧橋の上を、萌葱色の日傘をさし、銀鼠色の吾妻コートをまとつて、四五人の女中に取り巻かれて歩むのは洋行する夫を見送りに来た身重の伯爵夫人である。早春の横浜港をスケッチする作者の筆は冴えていて、少なくとも三月八日の日録に見られるような猥雑さは感じさせない。港に

吹く風が夾雑物を吹き払ってしまったのであろうか。石本次官や拊石の片鱗さえもない。

作品「棧橋」は、右の描写から始まって、仏蘭西船が出港した後の航跡に残る白波の映像でその幕を閉じている。「自分は徐かに踵を旋らした。そして四五人の女中に取り巻かれて歩む。棧橋が長い長い。今まで黒く塗った船の跡には、小さい波が白らけた日の光を反射して、魚の鱗のやうに耀いてゐる。」というフィナーレの記述は、緊張の後の弛緩、高潮のあとに迫り来る虚脱を描いてみごとである。それが猥雑であるか否かは別にして、伯爵夫人は日常性の中に回帰しなければならなかった。現行の「鷗外全集」でいえば、わずか六頁八十九行の世界に、「棧橋が長い長い。」というリフレイン refrain が五回、そして、「四五人の女中に取り巻かれて歩む」が二度にわたって用いられている。ともに意図的にして十分計算された使用である。「棧橋が長い長い。」のリフレインは、これから始まる夫との別離の時間の長さを象徴するとともに、文章に独特のリズムを与えているし、後者、すなわち、「四五人の女中に取り巻かれて歩む。」の二度目の使用は、しばしの寛假がその終焉を迎えたことを表している。四五人の女中たちに取り巻かれて歩む伯爵夫人の端然たる姿で始まり、再び女中たちに周囲を囲まれて横浜の棧橋を後にする夫人の帰り行く先には伯爵家の門構えがあるはずである。横浜の港でのわずかの時間に何の変哲も生じるはずもなかった。港へ夫を送りに来た時と同様に、夫人は端然として女中たちに取り巻かれる必要があった。帰り行く伯爵家での猥雑さなど、論外のことであった。少なくとも表層の世界では、航跡に残る小さい波が三月の日の光をきらきらと反射させただけであった。

「棧橋」と同様に気品と香気を感じさせる、凜とした作品に「杯」がある。小品である「杯」は、「棧橋」の発表の四か月前の明治四十三年一月一日発行の「中央公論」に鷗外の署名で掲載された。「一幕物の戯曲を思わせる作物で、同じ一月の十六・十七日の両日、「朝日新聞」に発表した

「木精」と共通する清冽美を感じさせる作品でもある。

鼓が滝へ赴く途中の水のきれいな泉のほとりでの、七人の娘と第八の娘とのやりとりの中に、自然主義に対する鷗外の心情を封じ込めた作品であるが、孤高の中に屹立する第八の娘の像は、伯爵夫人の先蹤でもあった。

第八の娘も伯爵夫人も、そして、無論のこと作者自身も、それぞれを囲繞する猥雑の中でひとり伶仃孤立を標榜しなければならなかった。「余の医林に於けるや現に敗軍の一将たり伶仃孤立、狼の狼を失ひしが如く海月の蝦を離れしが如し。」と記した心的状況は、ただに明治二十二年歳晩にとどまらなかつた。五十歳を目前にした明治四十三年も同様であつた。

七人の娘たちに取り囲まれた第八の娘は、黒ずんだ小さい杯を手にしたがら、しばしのしじまの後に、「Mon verre n'est pas grand, mais je bois dans mon verre.」とだけ言つた。娘は、一語一語をかみしめるかのように唇を開いた。各語の後に付せられたピリオドが、第八の娘の口吻を如実に物語っている。しかし、七人の娘に第八の娘のことは通じるはずもなかつたし、一方、伯爵夫人を取り巻く「四五人の女中」に夫人の胸中を付度するほどの手だてのあらうはずもなかつた。夫人はただ袂の中でバチストのハンカチーフをまさぐつただけであつた。

「杯」の第八の娘はしじまを破つて、「わたくしの杯は大きくはございません。それでもわたくしはわたくしの杯で戴きます」と言つた。そして、娘が数滴の水を汲んでほのかに赤い唇を潤した後は、泉のほとりの木立に差す朝日の光と朝の静謐があるのみである。清冽な泉はもとの静けさを取り戻した。

「杯」の主人公である第八の娘は、十六歳の瘦肉の小娘いぢの轍にならつて言えば、「最後の詞の最後の一句」を口にした。しかし、「棧橋」の夫人は、ただ人知れずハンカチを握んでみるだけであつた。棧橋のはずれまで走って行くことなどできるはずもない。「そんなはしたない真似」など許されるはずもない。

「棧橋」が発表されてから三年後の大正二年七月一日発行の「中央公論」に掲載された「鈍一下」に以下の場面がある。

H君は浜夫人をM君に紹介した。己はM君に自分の名を言った。M君は己に「秋吉に往つて御覽でしたか」と問うた。

「まだ行きません。併しいつか往つて見たいものです。」

己の背後には矢張りH君を送りに来た人が今一人ゐた。背の低い、白頭の老人である。H君はそれを己に紹介した。丁度己が其人に挨拶してゐると、埒の方から日傘を持つたお婆あさんが一人駆けて来て発車前に間に合つたのを喜ぶらしく、H君の耳に就いて何事かを聞いた。

H君を送るものは浜夫人、M君、背の低い老人、日傘を持つたお婆あさん、それに己を合せて五人である。発車の信号が響いた。H君は凝立して何か深く考へてゐるらしく、車に乗らうともしない。

「H君、早く乗り給へ」と、己が催促した。H君が乗つた時には、車はもう徐かに動き出してゐた。

M君が先づ此場を立ち去つた。浜夫人は汽車の出行く方に向いて立つて首を垂れてゐる。祈禱してゐるのではあるまいかと思つて、己は暫く猶与³³してゐるが、余り久しくなるので、暇乞をして帰つた³⁴。

心易い牛込の男爵の家を訪ねた時、たまたま聞き知つたH君とのしばしの出合いは、三時五十分の急行列車の発車までのわずかの時間である。「秋吉に往つて御覽でしたか」というM君の極めて平明な問いかけに対して、己が一步を踏み込んで「まだ行きません。併しいつか往つて見たいものです。」と応えたのは新橋停車場のプラットホームでのことである。

停車場ではM君の問いかけに応えて一步を踏み出しはしたものの、汽車の出た後の虚脱感の中で「暇乞」をして帰つた「己」の前には、厳然として「城鼠社狐³⁵」の世界が待ち受けているはずである。「いつか往つて見たいものです。」という己の言辭は、伯爵夫人がひそかに袂の中で繰り広げるパチストのハンカチーフとの語らいとどこかでつながっているはず

である。そして、横浜の港の棧橋でも、新橋停車場のプラットホームでも、あの「普請中」の渡辺参事官とドイツの歌姫との「晩飯」ほどの破格も起らなかった。わずかばかりの波動は袂の中で潰え去る必要があつたし、そのあとには、「併し」なる語に導かれた「いつか往つて見たいものです。」という当て所なき望みが残るばかりであつた。

「鈍一下」が七月一日発行の「中央公論」第二十八年第八号に発表された時、その末尾には「(一九、一三、六、一三)なる数字が記されていた。一九一三年、すなわち、大正二年六月十三日の意であろう。この日の鷗外の日録に「午前局長会議あり。本郷房太郎大臣に代りて首座に居る。滝田哲太郎来訪す。木越陸相官第へ宴会の礼にゆく。本間俊平東京に来て、直ちに又去る。新橋に送りにゆき、前田正名、俊平の長女武子等にも面会す。」なる記事が見られる。滝田樗陰の陸軍省医務局長室訪問は「中央公論」七月号への執筆依頼であろう。鷗外は大臣官邸訪問のあと、新橋停車場でH君のモデルである本間俊平に会っている。そして、鷗外はこの日のできごとを作品「鈍一下」の中に封じ込めている³⁶。作品末尾の「(一九、一三、六、一三)なる記事と「われは鍛匠を羨む。鈍の一下を以て日々の業を始む。」という一文の意味するところは深い。

「鈍一下」は大正二年六月十三日の新橋停車場での囁目の絵柄の登場する作品であり、それに先行する「棧橋」も横浜の港での囁目の作物である。冒頭部に「三月五日の風がまだ肌を刺すやうに吹いて来て、吾妻コオトの裾を翻すのである。」とわざわざ日付を明記したうえで、「(写生小品)」と注記した鷗外の思いを追尋するとすれば、「棧橋」脱稿の三日前の日録に帰着することになる。明治四十三年三月五日の日録には、「亀井伯爵茲常、福羽子爵逸人の洋行を送りに横浜にゆく。西村支店に午食して帰る。夜短詩会を家に催す。賀古鶴所来て耳を診す。母上賀古夫人に連れられて能を見に厩橋へゆき給ふ。」とある。その日録に密着するとすれば、夫人の見送りを受けて仏蘭西船で洋行する伯爵は亀井茲常ということになる。鷗外

森林太郎の生地津和野藩ゆかりの茲常である。作品「棧橋」では、「夫の伯爵は一昨年文科大学を出られて直に結婚せられた。始めて玉のやうな姫君を生み落したのが昨年である。その暮に式部官になられた。そして今は官職を帯びた儘、倫敦へ立たれるのである。」と記されている。また、「背の頭だけ高い同行の子爵某の君」とは、平田学派の国学者福羽美静の女婿逸人ということになる。文科大学に華族、そして、国文学の系統と、道具が出そろった感さえる。因みに、「秀麿は学習院から文科大学に這入つて、歴史科で立派に卒業した。」という五条秀麿を主人公にした「かのやうに」が書かれるのは、大逆事件結着後の明治四十四年歳晩のことである。十二月十四日の条に、「かのやうに脱稿す。」とある。Roman ideologue「かのやうに」は、「皇室の藩屏」たる五条子爵家の父と子との間の問題を扱った作品である。「棧橋」と「かのやうに」はその底辺で血脈相通じる作品である。

津和野藩ゆかりの後生の旅立ちの日は三月五日であった。久方ぶりの横浜港の棧橋の上で、鷗外の思念が二十有余年の昔に還つたとしてもさほど不思議ではない。森林太郎が「赴德国修衛生学兼詢陸軍医事也^⑩。」の命を受け仏船メンザレー号の人となつたのが明治十七年八月二十四日午前七時三十分のこと、夏も終りの横浜の港であった。同行の穂積八束萩原三圭長与称吉ら九人の氏名を列挙した後に、「送行者已散。九時発横浜。」の十字が記されている。虚脱感をただよわせる文言である。そして、落日の中心の「駭浪揺舟々回平。遠洋落日遊愁生。天辺忽見芙蓉色。早是殊鄉遇友情。」なる述作が見られる。この年数えて二十三歳、無論独り身での旅立ちであった。四十九歳の年の三月五日のように、この日も「今まで黒く塗つた船のゐた跡には、小さい波が白らけた日の光を反射して、魚の鱗のやうに輝いて」いたのであろうか。

鷗外森林太郎が「修衛生学兼詢陸軍医事」を目的にドイツに赴いた明治十七年から数えて四年後の明治二十一年十月十七日の小金井良精日記の

「午前五時起ク七時半解舟ヲ以テ発シ本船 General Warden 迄見送ル、九時本船出帆ス^⑪」なる記述は、同じ十七日付の石黒忠慮日記の一文、すなわち、「森林太郎来リ本日例之人ヲ送り届ケタル事ヲ云フ^⑫」を重ねて読む必要がある。「例之人」とは意味深長にすぎない。十六日夜の横浜糸屋への投宿だけが破格とでもいうのであろうか、懸案の大事件も直屬上司である石黒忠慮軍医監への報告によって一件落着となり、陸軍軍医学舎教官森林太郎は、再び「四五人の女中に取り巻かれて歩む。」思いを禁じえなかつたはずである。既往における規矩からの逸脱はみごとに修復され、城狐社狐、正しくは城狐社鼠の世界に回帰する必要があった。因みに、General Warden 出港の前日の小金井良精日記には「午後二時築地西洋軒ニ到ル林子来リ居ル二時四十五分発汽車ヲ以テ三人同行ス横浜糸屋ニ投ス篤子待受ケタリ晩食後馬車道太田町弁天通ヲ遊歩ス」とある。文中の「西洋軒」とは精養軒のことであり、「棧橋」に続いて六月一日発行の「三田文学」に発表された「普請中」では、渡辺参事官とドイツの歌姫との再会の場として折から普請中の築地精養軒が登場する。「渡辺参事官は歌舞伎座の前で電車を降りた。雨あがりの道の、ところどころに残つてゐる水滴まりを避けて、木挽町の河岸を、遞信省の方へ行きながら、たしか此辺の曲がり角に看板のあるのを見た筈だがと思ひながら行く。人通りは余り無い。役所帰りらしい洋服の男五六人のがやがや話しながら行くのに逢つた。それから半衿の掛かつた着物を着た、お茶屋の姉えさんらしいのが、何か近所へ用達しにでも出たのか、小走りに摩れ違つた。まだ幌を掛けた儘の人力車が一台跡から駈け抜けて行つた。果して精養軒ホテルと横に書いた、割に小さい看板が見附かつた。」とはみごとである。曾遊の地築地精養軒をめぐる、鷗外も手の込んだたくらみを企てるものである。

明治二十一年十月十七日の朝七時半、林太郎、弟篤次郎、小金井良精教授、それに当の Elise Wiggert^⑬の四人を乗せた解舟は沖合に碇泊中のドイツ船 General Warden 号に向かうべく横浜の港を後にした。沖で待つド

イツ船の舷梯をゆっくりと登って行った Elise Wiegert を見送る林太郎の心中にはいくばくかの波紋が生じたとしてもあながち不思議ではないはずである。しかし、陸軍一等軍医陸軍軍医学教官森林太郎は、再び立ち返ったはずの静謐の中で懸案事項の解決の報告をする必要があった。「森林太郎来り本日例之人ヲ船ニ送り届ケタル事云フ」とはみごとに過ぎる。虚構の世界の中で、横浜の港の棧橋に、「四五人の女中に取り巻かれ」て着いた伯爵夫人は、梯子をおさるおさる渡って、仏蘭西船の甲板に降り立った。そして、夫の案内で「我夢の通ふべき」キャビンを見、花籃の置かれたサロンを散策する。やがて鐸が鳴り、梯子を渡って棧橋に降り立った夫人の眼の前を船は徐かに動き始める。船上の人を追って棧橋のはずれまで走り行く者もあるが、もとより、伯爵夫人には「そんなはしたない真似」のできるはずもなかった。夫人には、再び「四五人の女中に取り巻かれて歩む。」ことだけが許されていた。船上のキャビンを自分の眼で見、やがて、「袂に入れて来た、バチストのハンカチーフを瘦せた指に掴んで見えた」のがわずかばかりの非日常性であった。「棧橋が長い」のは当然すぎる帰結でもあった。

ところで、鷗外の小説「かのやうに」は、学習院から文科大学に入り、歴史科を卒業した五条秀麿を主人公とする作品である。そして、五条家の嗣子秀麿はその出自と学歴の両面で「棧橋」の登場人物の面影を継承している。そして、「棧橋」の式部官の伯爵と子爵某の君の赴くところが倫敦であったのに対して、「かのやうに」の主人公キコント五条の留学先はベルリンであった。異国での三年間の生活を体験して帰国した五条秀麿が「思量の体操」の中で邂逅したのが Hans Vaininger の Die Philosophie des Als ob であった。今は画家になっていく綾小路とのやりとりが次のように描かれている。「かのやうに」の掉尾を飾る場面であり、綾小路は「フラスチエス」の伝に習えばデモンということになる。

秀麿は気抜けがしたように、両手を力なく垂れて、こん度は自分が寂し

く微笑んだ。「さうだね。てんでに自分の職業を造つて、そんな問題はそつとして置くのだろう。僕は職業の選びやうが悪かつた。ぼんやりして遣つたり、嘘を衝いてやれば造做はないが、正直に、真面目に遣らうとすると、八方塞がりになる職業を、僕は不幸にして選んだのだ。」綾小路の目は一刹那鋼鉄の様に光つた。「八方塞がりになつたら、突貫して行く積りで、なぜ遣らない。」秀麿は又目の縁を赤くした。そして殆ど大人の前に出た子供のやうな口吻で、声低く云つた。「所詮父と妥協して遣る望はあるまいかね。」

「駄目、駄目」と綾小路は云つた¹⁹⁾。

その名を Die Philosophie des Als ob から採つた作品「かのやうに」は、大逆事件の判決言い渡しを待ちかねるがごとく出来した南北朝正閏問題をその背景に検証すべき作物であるとともに、帰朝後のキコント五条の苦澁を描いた作品として、「棧橋」との一縷のつながりを指摘しうる作物でもある。無論「かのやうに」に続く「吃逆」「藤棚」「鎚一下」という、いわゆる秀麿もののほどの紐帯は認められないにしても若干の留意は必要であろう。

「棧橋」の主人公伯爵夫人が袂のハンカチーフとのいささかの語らいの後で、再び煩累の糸の中にわが身を閉じ込めたと同じく、五条子爵家の嗣子秀麿も「思量の体操」の中で父子爵から与えられた枷の中にわが身を置かざるをえないことに思い至る。「秀麿が為めには、神話が歴史でない」と云ふことを言明することは、良心の命ずる所である。それを言明しても、果物が堅実な核を蔵してゐるやうに、神話の包んでゐる人生の重要な物は保護して行かれると思つてゐる。彼を承認して置いて、此を維持して行くのが、学者の務だと云ふばかりでなく、人間の務だと思つてゐる。」というのが秀麿の考えである。「彼」と「此」との同時併存、すなわち、「神話が歴史でない」と云ふこと」と、「此」の指す「神話の包んでゐる人生の重要な物」との共存が学者の務だけでなく人間の務だと考える秀麿である。前

者はベルリン留学中の学問に裏打ちされた良心の命ずる帰結であり、後者は「皇室の藩屏」としての五条子爵家の家憲でもあり、日本人の義務でもあるとも言いたげである。「彼」と「此」との同時併存に悩む新婦朝者秀磨はフウベン形の瓦斯煖爐のある書齋で「ヂイ・フィロゾフィイ・デス・アルス・オツプ」Die Philosophie des Als obなる舶載の書を繙きつつ「思量の体操」の中で四季の移り変わりをながめている。そのような秀磨の姿態が次のように描かれている。初冬のころの山の手の日曜日のことである。

秀磨は暫く眺めてゐて、両手を力なく垂れた儘で、背を反らせて伸びを
して、深い息を衝いた。それから部屋に這入つて、洗面卓の傍へ行つて、
雪が取つて置いた湯を使つて、背広の服を引っ掛けた。洋行して帰つて
からは、いつも洋服を着てゐるのである。

末尾の「いつも洋服を着てゐるのである。」とはなかなか思わせぶりである。「彼」と「此」との問題、その二つのものの対立と折衷の構図の背景には、和魂洋才の系譜問題がある。平川祐弘はその著「和魂洋才の系譜——内と外からの明治日本——」¹⁵の中で、「鷗外とその周辺を徹視的に調査する基礎作業から出発して、明治の時代、とくに日露戦争前後の日本の知識人の精神状況を広く比較文化史的見地から考察するところにある。西欧化するこの国の和魂の行方を探ることが『和魂洋才の系譜』の主眼なのである。」と記して執筆意図を明確にしているが、作品「かのやうに」における「彼」と「此」との対峙と折衷の図式は、換言すれば平川祐弘の鮮明な分析に見られる「西欧化するこの国の和魂の行方」に係ることである。その意味において袂の中のバチストのハンカチーフという設定は重要である。夫人はハンカチーフを「擱んでは見た」ものの、それは袂の中の出来事として終らざるをえなかった。バチストのハンカチーフを手にしながら伯爵夫人の行為は袂の中という和服の中に限られていた。洋才の世界に赴く夫を見送る夫人は当然のことと和魂の世界に棲息すべき人であった。

無論、「はしたない真似」など慮外のことである。

瘦せた指でハンカチーフをまさぐっただけの、いわば「破格」にならないほどの「破格」の後、再び女中たちにもわりを取巻かれて歩み行く身動の伯爵夫人の行き着く先には、「普請中」の中の自虐の呪文が蜷局を巻いている。「ここは日本だ。」という二度のリフレインは絶妙である。そして、普請中の国の参事官渡辺の言挙げにつながり行く東の国日本の命題は、やがて、七月一日発行の「三田文学」に発表される「花子」の末尾においてみごとなあだ花を咲かせることになる。

マドモアセユは実に美しい体を持つてゐます。脂肪は少しもない。筋肉は一つ一つ浮いてゐる。Fasciaの筋肉のやうです。臄がしつかりしてゐて太いので、関節の大きさが手足の大きと同じになつてゐます。足一本でいつまでも立つてゐて、も一つの足を直角に伸ばしてゐられる位、丈夫なのです。丁度地に根を深く卸してゐる木のやうなですね。肩と腰の潤い地中海のtypeとも違ふ。腰ばかり潤くて、肩の狭い北ヨロロツパのタイプとも違ふ。強さの美ですな¹⁶。

ロダンのことばに内包される黄禍の系譜が不発に終わってしまったのは鷗外森林太郎の予測外のことであつた。

明治四十三年五月一日発行の「棧橋」に始まって、「普請中」、「花子」と続く作品の中に見られる、此岸に立脚しての言挙げの中にはある種の剣呑なるエネルギーがある。ヨーロッパの二つの美に対峙しうる第三の美、すなわち、「強ちの美」の存在証明をAuguste Rodinにやらせる鷗外の目論見には東への傾斜が濃厚である。明治三十七年八月十七日の「黄禍」以来の伏流水がその姿を現した感さえる。「花子」末尾に見られる色調には、「勝たば黄禍 負けば野蠻 白人ばらの えせ批判 褒むとも誰かよろこばん 謗るを誰か うれふべき¹⁷」という第一連に象徴されるNationalistischな旋律につながるものがある。

しかし、鷗外にとってある種の僥倖が出来るのが眼前に迫っていた。

すなわち、六月一日の幸徳秋水検挙に端を発する刑法第七十三条に関する被告事件であった。秋水の身柄拘束を拠点として、急速に Conservative な軌跡をたどり始める近代国家日本の中枢部にあつて大逆事件がものみごとにフレームアップされて行くことになるが、その過程において鷗外の視座は西からのそれに移行して行くことになる。

「棧橋」にその片鱗を見せた命題は、「普請中」で膨らみを見せ、続く「花子」で一つのドグマとなつて姿をあらわしている。花子の実体との乖離は存分に承知のうえで、「肩と腰の潤い地中海の type とも違ふ。」「腰ばかり潤くて、肩の狭い北ヨロッパのタイプとも違ふ。」「第三の美のデビューが描かれている。「強さの美」という第三の美が近代彫刻界の巨匠 Auguste Rodin の讃辞によつて十分に裏打ちされているところが剣呑至極である。

しかし、このような東への傾斜は、「花子」に続く「あそび」には見られない。明治四十三年八月一日刊行の「三田文学」第四号に発表された「あそび」における鷗外の視座は彼岸にある。「revelé」の譜¹³⁾を吹くガンベッタ麾下の兵に与する鷗外は、「フラスチェス」「沈黙の塔」「食堂」と続く「三田文学」掲載作品においてみごとに西からの視座を展開することになる。

明治四十三年五月一日に創刊された「三田文学」に「棧橋」を発表した鷗外は、続いて、以下の作品を発表することになる。すなわち、「普請中」(六月)、「花子」(七月)、「あそび」(八月)、「フラスチェス」(九月)、「沈黙の塔」(十一月)、「食堂」(十二月)の諸作品であるが、これら七作品の中には二つの系譜が存在するというのが筆者の仮説である。その一つの系譜が「棧橋」「普請中」「花子」の三作品であり、もう一つの系譜を構成するのが「あそび」「フラスチェス」「沈黙の塔」「食堂」の四作品である。

注

- (1) 「鷗外全集」(岩波書店 昭和四十六年(五十年刊) 35—四七九)
- (2) 「鷗外全集」 6—三二
- (3) 篠原義彦「作中人物命名法——漱石と鷗外の場合——」(「高知大國文」第十八号)
- (4) 「鷗外その紋様(昭和五十九年小沢書店) 三三四頁
- (5) 「鷗外全集」 6—一五〇三
- (6) 「鷗外全集」 29—三三三三
- (7) 「鷗外全集」 7—一九
- (8) 「鷗外全集」 10—一一九
- (9) 篠原義彦「森鷗外の軌跡——『鈍下』をめぐって——」(「高知大学学術研究報告」第三四卷)
- (10) 「航西日記」(「鷗外全集」 35—七五)
- (11) 長谷川泉「エリス『事件ノ独逸婦人』」(「鷗外」第十五号、昭和四十九年)
- (12) 竹盛天雄「石黒忠愍日記抄(三)」(「鷗外全集」月報38)
- (13) 朝日新聞昭和五十六年五月二十七日付第十八面、五月三十一日「ひと」欄。金山重秀・成田俊隆「来日したエリーゼへの照明——『舞姫』異聞の謎解き作者の経過——」(「解釈と鑑賞」第四十六卷八号、昭和五十六年八月)
- (14) 「鷗外全集」 10—七八
- (15) 河出書房刊 一一頁
- (16) 「鷗外全集」 7—一九七
- (17) 篠原義彦「森鷗外『あそび』の問題」(「高知大國語教育」第三九号)
- (18) 「鷗外全集」 19—二六一
- (19) 「鷗外全集」 7—二四四

平成六(一九九四)年九月二十日受理
平成六(一九九四)年十二月二十六日発行